

令和元年度 金沢市森づくり市民会議（第2回）

日 時：令和元年10月25日（金） 13時30分～15時00分

会 場：金沢市役所7階 第4会議室

出席委員：石原委員、岩田委員、上田委員、河崎委員、千田委員、橘委員、能木場委員、安田委員、山本委員

欠席委員：竹田委員、都野委員、中川委員、増江委員、森委員、山田委員（五十音順 敬称略）

事務局：山田農林水産局長、西川森林再生課長 ほか6名

【次第】

1. 開会
2. 議事
 - (1) 令和元年度森林再生施策の進捗状況と課題について
 - (2) 森林環境譲与税関連施策の進捗状況について
3. 意見交換
4. 閉会

【議事録】

事務局より説明

- (1) 令和元年度森林再生施策の進捗状況と課題について
- (2) 森林環境譲与税関連施策の進捗状況について

（会長）

市からの説明を受けて、意見や質疑などはあるか。

（委員）

木の家づくり奨励金について、177件の申請があったということだが、金沢市の木材を使ったら何がいいのか見えてこない。また、金沢産材を使った結果、「こんなによくなった」と実感できると利用する意欲に繋がるのではないか。

私も昨年制度を利用したが、家のどこに金沢市の杉材が使われたかわからない。この制度でたくさんの方の木材を使ったとしても、利用促進ということに積極的に繋がっているのかが疑問だ。

また、業者にとってもプレミアになるような仕掛け、あるいは実際に建てた側にしても、もう少し誇れるような仕掛けがあるとよいのではないか。

（事務局）

金沢の杉材がブランド化できればいいとは思っているが、それは難しい。能登にはヒバがあるが、金沢にはヒバはなく杉だけになってしまう。なかなか他と差をつけることができず、どうしても業者に、補助が出るから市産材を使ってください、という形になってしまう。

補助利用が年間177件となると、かなりの量の金沢産材を使用している。制度がなければ市産材

の利用が減ってしまう。一方で、見直しを考える時期にあるとは考えている。

(委員)

例えば「この会社は市産材を積極的に使用している会社だ」という事業者に対する表彰など、地元の木を薦めるための積極的な動機づけがほしい。「地元の木だから使いましょう」だけでは、利用促進は難しいのではないかと。

(委員)

材として杉は、香りが強いわけでもなく、あまり地域によって変わらない。しかし、市産材を使うことは、環境コストの観点からは運搬距離が短いため、いいことだと思う。

例えば、家を建てるときに地域産材を使っていますという旗を建築中に出すようにすると、近所の人々が、この家は地元の木を使っているのだな、素敵なお家だなと思うかもしれないし、業者の方も、地域に貢献しているというPRになると思う。

また、外に出す柱は、無垢の本当にいい柱でないと和室に使わない。金沢産の杉柱は、ほとんど柱の見えない家だけに使われている。逆に、フローリングや腰壁に使ってもらえると、木を使っている実感が持てると思う。

(委員)

例えば、金沢産材の表札を杉板で作って、施主さんに進呈するのはどうか。

(会長)

森林再生課は金沢産材のブランド化ということに、こだわりすぎているのでは。質的にいいのかとか、金沢らしい木材というブランド化は一つの方向ではあるが、例えば農産物の場合、「顔が見える生産者」というのがある。例えば、建築主が山主や山を見て、ここの木なのだという意識を高める。そういう顔が見えるブランド化のほうが、コストをかけずできると思う。

経済的な価値は必ずしもなくても、それこそ多面的機能がバックにあるわけなので、ストーリーを作ると、今のご意見に対する答えになると思う。

一方で業者さんにプレミアという話があったが、短期的には可能だろうが、長期的にやっていくには予算が幾らあっても足りず、市民からも賛同が得られないのではないかと。プレミアは精神的なプレミアとして、業者が意識してくれるよう考えるべきではないかと。

(委員)

市民や企業との協働による森づくりの推進を私は重要視している。課題の中で、企業の森づくりの活動に参加者が集まらないとあるが、活動自体がPR不足ということに加えて、目的がはっきりしないのも一つの理由ではないかと。

例えば金沢市でCO₂をどれだけ削減して、どれだけの目標になっているのか。そのための森の再生はこう必要なのだ、など、目的をもう少し具体的にしてPRしたほうが良いのではないかと。

(委員)

森づくりサポートバンクの登録者の中で実際に今も動いている人はどれくらいか。新規の方をふやすのもいいが、せっかく登録してくださっている方がいるならば、そこのフォローを先にしたほうが、より森づくりの推進になるのではないかと。また、企業の森づくり活動は会報などで紹介しているのか。

(事務局)

登録者が、継続的に続けているかを詳細に追ってはいないが、ずっと続けている団体は、半分ほどではないかと思う。やってみただけど大変で続かないという声もある。

活動はサポートバンクの登録者に送る「森づくり通信」の中で紹介している。また、サポートバンクのホームページにも載せており、なるべく市のホームページから見つけやすいように改善した。SNSを使ったPRなど、活動をどう周知するかも課題だと考えている。

(会長)

どのような方法をとるかというのは難しいだろうと思うが、少しでも関心のある方を取り込んでうまく展開するしかないのかなと思う。そういう意味で森づくりプランの冊子も、もっと市民にアピールできるものになればと思う。

譲与税についてはどうか。譲与税については、ゾーニング（注：森林が持つ多面的な機能を高めていくため、最も重要視すべき機能に絞って森林地域を区分すること）という手法が話の中に出てきたが、森林をどのような形にしていくか将来計画を立てていくかということで、環境保全という面の問題もここに入ってくると思う。

(委員)

ゾーニングということと、針葉樹と広葉樹の混交林というのはどう違うのか。

(会長)

それを含めても、ゾーニングになる。樹種によるゾーニングもあるし、経営も関わってくるということは、森をどう継続させるかという面も入ってくると思う。

さらには環境保全という面も含めて、ゾーニングを何重にも重ねることはできるし、ある所だけ取り外すこともできるが、金沢市の森全体の将来性を含めた視覚化ができればいいと思う。

そのことと関連して、土地地番で区切るのではなく、山全体で一体となった計画を作りたいという意見もある。

(事務局)

金沢の場合は森林の所有者が非常に細かく分かれており、広い区域で皆さんの意思が一つに揃うかといえば、難しいのが実情と考えている。

例えば能登のように、一山につき1人の所有者ということになれば、その山全体を皆伐したいなどの話も割としやすいが、金沢の場合は難しい面がある。所有者がもう杉はいらないと言えば、その森林に関しては広葉樹林や混交林に徐々に進めていくというように、モデル的に行うのがよいのではないかと思う。

(会長)

事情の複雑さはわかるが、それにこだわっているとゾーニングはできないのではないか。基本的なゾーニングの素案を作って、大局的な計画を立てたあとで、個別の課題に対応していくというふうに考えてはどうか。

(委員)

林業経営に適した森林は林業経営者に再委託できるということだが、それ以外の適さない森林を市が直接管理を行うとある。経営できない森林を市が引き受けるとなると、人件費も膨大になり、永く続けられないと思う。

人件費をずっと払い続けていく方針なのか、利益がでるよう工夫していくのか、それとも人件費

をかけないような方法を考えていくのか、今後の方針について知りたい。

(事務局)

森林経営管理制度では、見直しができる期間は定められていないが、現実的には、10年を一つの区切りとして、見直しができるような森づくりを考えていきたい。また、市が管理し続けるのではなく、広葉樹林化を進めて、管理コストをかけない森林にしていく方法もある。

また、災害時の倒木除去なども可能になる。さまざまな取り組みができるのが森林環境譲与税のよいところであると思う。なぜ税金を使うのか、市民に対しては共有財産として災害防止の観点から、森林を保全することも必要だということを示す必要がある。

ゾーニングについて説明すると、概ね四つの柱を考えている。

①保安林、土砂災害警戒区域、自然公園区域といった、法律上制限されている区域、②傾斜・勾配・土壌といった地理的な側面、③竹林、広葉樹林、針葉樹林、植生についての側面、④森林所有者の意見というのを四つの柱として考えている。

①～③は客観的な評価をし、④では、森林管理に意欲のある人と、管理委託を希望する人を市が仲介していくことも今回の制度の趣旨なので、森林所有者の意志や、相続の関係を考慮しつつ、ゾーニングを進めていく予定だ。どういった施策を進めていくか、つまり、広葉樹林化や、伐採後の再造林など、方向性を考えていきたいと思う。

(会長)

つけ加えると、環境保全や獣害の問題も加味したゾーニングも必要になるかと思う。ゾーニングの問題はかなり重要な問題で、これから森づくりをする上で、繰り返し考えることになると思う。

ここからは、残りの議論を広葉樹林化という問題に焦点を当てたい。

(事務局)

手入れ不足人工林は野生動物の餌が少なく、里山集落への獣害にも繋がるので、市が所有者から委託を受けた森林については広葉樹の植樹も検討しているところだ。

(委員)

ある程度まとまった面積を皆伐しないと、日照条件が悪く、広葉樹が育たない。ただ、積雪が多いという地域的な特性を考えると、杉を切ったらどこでも広葉樹が育つというわけではない、という話を聞いた。

(委員)

全国で人工林率が40%くらいだが、金沢では人工林率は25%で、まとまった所は市営造林だ。地主の理解を得た杉林を皆伐して広葉樹林化を進めてみるというやり方もあるとは思う。ただ、皆伐しなくても、間伐率を高くすれば、植えなくても自然に広葉樹林化が進む森林もあるので、一つの方法に決めないほうがよいと思う。

(会長)

針葉樹と、広葉樹が対立すると考える必要もない。杉を間伐したところに、広葉樹が生えてくるのであれば、それはそれでいいのかもしれない。

(委員)

私が森林の多面的な機能のうち重要だと考えるのは、林業経営の場よりも、酸素の供給とか、災害防止といった公益的機能だ。

その機能を誰が保障するかといえば、国や自治体だと思う。今回の制度は、経営者側にとっては辛いかもしれないが、森の公益的な機能を維持するいい方法だと思っている。

(会長)

森林の公益的機能はとても大きい。森づくり経営者だけに任せてはいけないし、市民目線の考え方もあるので、この会議の役割は重要だ。

他方、森づくりの色々な取り組みというのは、行き詰っていると思う。中国地方ではかなり進んでいる所もあるので、何年かに一度は先進地の現地視察なども行って、先進地の知恵を取り入れていくことも検討したらよいのではないか。

(委員)

私たち金沢市校下婦人会連絡協議会では、55周年記念時に、動物たちが食べることができる実がなり、森林浴を楽しむことができる森をつくろうということで、市と相談して「友情の丘の森づくり」を始めた。これまでコナラの木を110本、桜を10本ほど植えた。ちょうど今年で15年経ち、続けて手入れをしていると、荒地が森の風景に変わってきた。

やはり森づくりというのはみんなが力を込めて、みんなで一つ何か目的を持って行くと成果がでるのかなと思っている。

(会長)

この機会に何か提言、あるいは次回のテーマとして提案したいことはあるか。

(委員)

住吉町のナツツバキ、国見町のヤブツバキ、東原町では水芭蕉の群落があり、このような地域の特徴に脚光を当ててはどうか。観光客だけではなく、市民にもたくさん来てもらえるような環境整備が必要だと思う。

また、金沢で採取されたクロモジが漬け込み酒の原料として使われる予定になっている。まだまだ利用されていない林産物の利用が広がるといいと思う。

(会長)

森歩きの見どころスポットについて、わかりやすいパンフレットや地図をつくるのはいいと思う。また、クロモジをはじめ、広葉樹も昔はもっといろいろな使い方がされていたわけなので、大きな林業でなくても、小さい林業でやっていけるものが幾らでもまだあるのだろうと思う。そういった観点から広葉樹林化を推進していけたらいい。